



競泳女子

浣腸地獄

キック文庫

競泳女子浣腸地獄

キンク文庫

文庫本（40字×17行）

214ページ

第1章 美咲のお漏らし

濡れた生地が程よく肉づいた腹筋とおへソの丘陵を淫猥に浮き立たせる。そして下側にある恥丘の膨らみは、水着という細い紐群で縛られている。

薄い競泳水着の下にはアンダーショーツを履いているのか、恥丘から割れ目にかけて布一枚分くらい膨らみが感じられる。だが発育の良い女子高生の下腹部を覆うには、伸縮性のある競泳水着すら役に立たない。どうしても恥毛のない乳白色をした大陰唇の肉が、水着の両脇から恥ずかしそうにはみ出す。

膨れ気味の股間の真ん中辺り、彼女の小陰唇そして膣口に繋がっていることを想像してしまう卑猥なクレバスが、奥にある湿潤地帯に向けて切り込まれている。

今まで平泳ぎの練習でもしていたのだろう、もしくは普段からあえて食い込むように意識して歩いているか。いくら窮屈な競泳水着とはいえあれだけの吊ったような状態にあれば、股下からの刺激はかなりのものである。

プールから上がったばかりで、股間の下のちようど小陰唇辺りは、光に反射して水が溜まっているようだ。さらにそれは、水着を付けたままお漏らしをしてしまったような印象を持たせる。

達也一人だけがのんびりと浸かっているジャグジーに彼女らは近づいてきた。

ポタポタと股の下から水がしたたり落ちている、あの水を股の下から拾い上げながら、水のテカりで形がさらに露わに映っている縦線上にあるクリトリスを、中指でやさしく触れてあげたい。すでに湿っていて、ぴったりとマンコの肉に張り付いているような水着特有の生地であれば、指先が縦線を擦りながらさらには臍口に刺激を与えることも難しくはないはず。

最近の競泳水着はハイレグの角度が激しくて、こんな大胆なV字の水着を高校生が着ているだろうか。だがあくまで競泳という観点からしたらこのデザインの方が泳ぎのタイムが上がるのだろうか。

顔はまだ幼い感じなのに身体は普通の女子高生よりもセクシーだ。高校生だしプールの中なので化粧はしてない。目がぱっちりとしていて印象深く、あたかも偽物のように長いまつ毛が瞬きをするたびに水を弾く。手の甲で目のあたりを擦って水をはらうその仕草は、苛められて涙を流している女の子にも見えてしまう。

目をチカチカとさせ、手の甲で顔について水を払いのけながら、隣のひと回り大きい女友達と一緒にいる。クロール泳ぎ方について話しているのか、掻くような感じで手を交互に上げたりしながらこちらに歩いてくる。

脇の下に恥毛はいつさい見当たらず、乳白色の脇の下まわりの肌が、周辺の幼くも徐々

に熟しつつある肉筋と相まって、何とも卑猥な印象を与える。

彼女らがちょうどジャグジーの前を通り過ぎた。

競技として水泳をしているからだと思うが、腰回りはぎゅつとクビれていて贅肉一つなく、そこからスラリと何の不自然もなく程よく締まった尻の出っ張りにつながっていて、太ももはスイマー特有の肉で覆われ、比較的以太い気がする。

膝から下の部分は筋肉のスジが判るくらい締まったふくらはぎをしている。この身体にV字のハイレグ競泳水着を着られ、さらにギューギューと股間を吊られるように食い込んだ股間を見せつけられると、正直達也の手は自然と自分の逸物へといってしまう。

バツテンに形作った紺色の線が、後ろから見たら意外と華奢な上半身を縛るように締め付けている。よくテレビとかで見る競泳選手のような筋肉質の肩という訳ではない。よくこんな華奢な肩周りで、さっきまで見ていたクロールのようなスピードが出せるんだらうと思う。

上半身だけはごく普通の女子高生という感じだ。多分、上半身が太くなってしまうだろう。下半身の強力なバタ足でそれを補っているから、あれだけの肉付きの良い脚になるんだらう。

身体の真ん中にすーっと背筋が通っていて、その下にやはりキツイV字の水着の生地が、

若いという理由からかほとんど崩れていない極めて形の良い尻を、締め付けるように覆っている。

太ももに比べると尻の肉の突き方はそこまで多くはないが、それでも身体の発育に水着の買い替えが追いつかないのか、片方のV字の部分が、尻の割れ目に食い込んでいて、かなりTバックに近い状態になっている。

しばらく水着の生地に挟まれてぷりつと膨れた、普段は布に覆われ外気に曝されていない白肌尻の肉の部分を美味しそうに眺めていた達也だったが、彼女も水着の尻への食い込みに気付いたようで、両手の指先を水着と皮膚の間にすつと滑り込ませて、食い込んでいた布地を内側からえぐり出すように指先で引つ張った。すると一瞬、彼女の初々しくも肉感的な尻の膨らみがふるふるつと震えた。

会社を退職し、次の職探しにハローワークに通う達也だったが、既に中年にさしかかっていた達也を雇ってくれるような会社はなかなか見つからなかった。

世間では大学の新卒ですら、そう簡単に就職できないということには分かっていた。それでも実質的には週休1日あればラッキー、サービス残業なのに終電までに帰ればいい方という、どう考えても労働基準監督署に目を付けられそうな、達也の勤めていた会社は所謂ブラック企業そのものだった。

そんな会社で、何か問題がある毎に深夜でも休みでも何時どこでも携帯に連絡してくる上司に耐えられなくなった達也。このままでは本当に精神的にイカれてしまうというところまで追いつめられていた。

達也は会社を退職するという選択が出来ただけマシだった。というのは「業界から出て行かない限り、俺はお前を裏切りものとして認識しておくから覚悟しとけよ」というような脅しにも似たことを言われた同僚もいた。

そんな酷く狭い業界に縛られたくなかった達也は、五体満足なら誰でも働けそうな土木関連の仕事を探した――がやはり、今までホワイトカラーの仕事の経験だけで、土木の知識も経験も資格も何もない達也は面接すらしてもらえなかった。

しようがないのでしばらく体力をつけてから働こうと、近くのホテルにある屋内の温水プールに通うようになった。

不健康な仕事漬けの生活から一転して毎日何もすることがない、そしてゆったりと自分の趣味とかを考えられるような余裕のある生活を送れるようになった。

貯金の減り方はかなり激しかったが、金の問題ではないと感じていた達也は、しばらくそんな悠々自適な生活を送ることにしたのだ。

美咲に初めて出会ったのはその頃だった。

7月も後半にさしかかったある日、いつものようにホテルのプールを10回程度往復し

で泳いだ後に、大人が数名入れるくらいの大サイズのジャグジーでぼーっとしていた。

別のコースで練習していたのか2人の高校生と思われる女の子らがプールから出てきた。泳いでいるときは気付かなかったが、おそらく自分の後にプールに入ってきたのだろう、2人でちょうど1つのコースを占領するように泳いでいた。

練習を終えた2人の女の子、特にもう一人の子よりも小柄な子の可愛さに、くらくらつときてしまった達也。単に顔が可愛いというだけではなくて、成熟しかけている身体にぴつたりと張り付くように肉々しさの陰影を惜しげもなく映し出すハイレグ競泳水着がまた健康的で良い。

疲れ切っていた中年男のすきんだ心をさっぱりと洗い流してくれるような清楚で可愛らしいという表現の似合う女の子だと思った。

そして達也は、次の週も同じプールに行ってみた。案の定、美咲とその友人が、前回と同じように競泳の練習をしている。

(おっ、いるいる)

彼女らがまた泳ぎに来ているのかどうか半信半疑だった達也。クラブ活動の一環として、決まった曜日にこのプールに泳ぎに来ているのでは？ という予想は当たっていた。

前回に見た時と同じ色と柄の競泳水着を着ている。おそらくまったく同じものだと思う。

全部で8コースくらいあるこのプール、彼女らは3コースという上級者、つまりコース途中で歩いたり止まったりしない泳ぎっぱなしの人達のためのコースにいる。

競泳大会でも近いのか、ストップウォッチを片手に2人で神妙な面持ちをしている。前回のここで見た時よりも2人の顔色はすぐれない。

「タイムぜんぜん伸びないね、美咲」

「う〜ん……そんなに酷いって訳じゃないけど、この時期で2人ともこれだとちよつとマズイかな」

「だよね。先生怒ると思う？」

「うんたぶん。大会って来月だし、それでずっとこのへんのタイム出してたんじゃ——」

「でも美咲は大丈夫だと思う」

「えっ、なんで？」

「だってこの前の大会でもう優勝とかしてるじゃん。私なんかコレでせめて入賞でも出来なかったらレギュラー落とされるかも」

「ええーっ、香はそんなことないってばー」

「美咲みたいに綺麗に泳げたらいいのになって、いつも思ってるんだけど」

「えーっ、香ちゃんも綺麗に泳げてると思うけどなあ」

「そうかなあ」

「うん、バタフライと背泳ぎは私より速いし、ぜんぜん追いつかないもん」

「だって美咲は元々クロール専門だったじゃん」

「まあクロールだけなら」

「いってクロールだけでも。地区のトップクラスなんだし」

「そのクロールのタイムが伸びてないんだもん——なんかちよつと落ち込む」

「来週は先生も見に来るんだし、頑張んなきゃ」

「あつそうだった」

「じゃあもう一本ね」

「うんっ」

2人とも似たような濃い青色をした競泳水着を着ている。今どきの中高生用が着る競泳水着はそうなのか、股間はV字の食い込みに、さらに背中のはほとんどは見えている。

大人だとこれくらい食い込みはさすがに恥ずかしいはずだが、高校生ではそんなことはないのか、それとも競泳の世界ではそれくらい見せてでもタイムを縮めること優先なのか、彼女らの股間の露出度に対する無関心さは、達也の中年男にとっては何よりの目の保養になる。

実際にビキニ姿でこういう温水プールに来る女の子もいるが、そういう子に限ってたいしたスタイルをしていない。男の視線を意識したいがためにわざわざビキニを着て、さら

に下手な泳ぎでプール内ではしゃぎ立てる。

正直、ハイレグ競泳水着を来た純真無垢な中高生の方が、よほど色気があるように見える。

2人がプールのコース両端から、中央付近で互いに交差するように泳ぎ始めた。

1コースにつき「行き」と「帰り」用のレーンで分かれているので、両方から同時に泳いでも、お互いにぶつかることはない。プールを2〜3回往復して、最後にストップウオッチを押す。彼女らはそれを数回繰り返し返している。

達也はしばらく2人の泳ぎを傍観していた。

彼女らの他にまともに泳いでいる人間はいない。ウォーキングコースとかでリハビリをしてそうな高齢者、あとは初心者コースでゆっくりと適当な平泳ぎをしている中年の夫婦など。いかにも平日昼間のプールという雰囲気である。

そして達也は、美咲らがタイムを計りながら泳いでいるコースに静かに入った。

彼女らが学校のクラブ活動の一環としてこのプールを利用しているということは、彼女らが着用している学校名入りのスイミングキャップ、あとコース脇に置いてあるストップウォッチを見れば一目瞭然だ。

であるが、達也はこのプールに来るのは初めてで、泳ぎもたいしたことはないというフリをした。実際に、達也がこのプールに通い始めたのは先月で、泳ぎも下手なことには違

いない。

達也には明らかに下心があった。そしてまずは美咲に話しかける。

前回ここで彼女に出会った時から心に決めていた。どうしても彼女と知り合いになりたい、あわよくば男女の関係になりたいと。

彼女が高校生で処女かもしれないということが、達也の彼女に対する下心を強める材料になった。

達也がプールの端の壁に背中を付けて、美咲がそこにクロールで帰ってくるタイミングだった。

ちょうどタイムを計り終える周回だったので、達也の後ろ付近に置いてあるストップウォッチを取ろうと、美咲は達也に一礼をしながら手を伸ばした。

「あっ……すみません」

何か申し訳なさそうにくくりと頷きながら、達也の後頭部のうしろ付近に手を伸ばす美咲。手を伸ばした瞬間に、間近で見る彼女の脇の下の色気と、そのほのかな香りを初めて味わった。

(すう……。ああ、なんて可憐な匂いなんだ)

彼女の匂いを含んだ空気を思いっきり吸い込みたかったが、間近でこんな中年オヤジがそんなことをしてしまっただけは間違いないと嫌われると思ったので、ここは我慢した。

ストッププウオチを手にして、今回の自分のタイムに不満そうな顔をする美咲。
ほんの少し間を置いて、

「高校生？」

達也は思わずそう話しかけた。

まさか知らない男から、突然プールで話しかけるとは思ってたという感じの美咲は、

「えっ……あ……はい……」

突然のことにびっくりしたのと、自分のタイムのことで頭がいっぱいだったのか、ほとんど達也のことなど眼中にないような、そんな返事の仕方だった。

実際に達也のことなどお構いなしに、次の記録をスタートさせようと、すでにストップウオッチをピッピッといじっている。

「すごい速いよね、どうやったらそんなバタ足って出来るの？」

街で若者が、携帯をいじる様な感じでストッププウオチにをいじっている美咲。そのすぐ隣で、美咲の横顔をじっくりと観察しながら尋ねる達也。

水泳の技術的なことを聞いたのが幸いしたのか、美咲は達也の方を向いて、

「バタ足……ですか？」

「おっ……うっ、うん。なかなか君のバタ足みたいに上手くないんだよね」

水中で片足を前に出して、疑似的にクロールのバタ足を真似る達也。水中に潜って見ないとちゃんとバタ足がなされてるか、なんてわからない筈である。

だが、話す時間を延ばすための話のネタにと思い、そんなことを尋ねた。

「うーんと……」

答えに困っている様子の美咲。

水泳のコーチでもあるまいし、ましてや普通の高校生。こんな知らない中年男にバタ足の仕方なんて上手く説明できないだろう。

しかし達也にとっては、彼女がうまく説明できなくて、しばらくここで自分と戯れてくれることが何となく嬉しかった。

「うーん上手く説明できない」と悩む彼女のその可愛らしい顔を間近で見ることが、いい年して独身で無職、普段の生活がつまらないものになりつつある達也の唯一の愉しみにすらなりそうだったのだ。

「膝とかがって伸ばすの？」

一応、クロールを速く泳ぎたいとも常々思っていたこともあり、せつかくなので技術的なこともちゃんと聞いてみた。そもそもそこら辺の水泳教室の年取ったおばさんなんかより、近代的な泳法で競泳大会とかで実践している高校生に聞いた方がいいに決まっている。「うーんと……どうだろう」

自分でも足を延ばしてバタ足をしてみる美咲。

(う〜ん……かわいい)

さつきまで何往復かして少し息をきらしているにもかかわらず、知らない達也の質問にもちゃんと答えてくれている。

彼女の愛らしい横顔に、先週見たあのきわどいハイレグ水着の股間からはみ出している白い肉を重ね合せた。

「わっかんない……かな」

苦笑いしながら美咲はそう答えた。その笑い方は本当にわからないといった答え方で、実際に彼女らからしてみれば、理論とかではなくて体で試行錯誤しながら覚えている段階なのだろう。

「そっか——」

「はい」

達也からの質問が終わったと思い、美咲は再び目の前のコースに顔を向け直し、泳ぐのに集中しようとしていた。

「手はこんな感じ？」

達也は左手を挙げて、今度はクロールの手かきのやり方を質問し始めた。すでに泳ぎだそうとしていたので、美咲の方は少し迷惑そうな顔をしていた。

「う〜ん……と」

最初は答えようかどうしようか迷っていた美咲だったが、かなり近くで裸の知らない男に自分の顔、さらには胸元あたりまで見つめられていることに気付いたようで、パツと頬を赤らめた。そして、

「こっ……こっかな」

恥ずかしそうに片腕を上げてクロールの掻く仕草をした。しかしそれはさっきのバタ足の時よりもかなり躊躇した感じだった。首をたびたび傾げながら、半信半疑という感じで腕を挙げている美咲。

もしかしたらこの男は自分に気があってこんなことを聞いてきているのかもしれないと思っている様子がありあった。

達也の目と鼻の先に彼女のまっさらな脇の下が見えている。

近くで見ると本当に毛らしきものがない。脇の下特有の肌の段差というかシワまでしっかりと確認できる。

脇の下のほとんど外気に曝されたことがないような真っ白な肌と、腕まわりの少し日焼けしてプリプリとした張りのある感じのコントラストが可愛らしい。

そして何より、少しだけ汗ばんだ脇の下から漂ってくるほのかな甘みのある新鮮な匂いが堪らなかつた。脇の下の匂いなどまだ気にしていない無頓着さゆえの、人工的な匂いと

いうものを完全にそぎ落とした感じの匂いだ。

「あつ……」

達也の脇の下への視線に、何か恥ずかしさを感じたのか、美咲はさつと腕を下げた。そして頬を赤らめたまま下を向いてしまった。自分も思わず挙げていた腕を降ろした達也。

すると突然、もともと窮屈だった2人の距離に2本の腕が入り込んできたせい、一瞬だけお互いの二の腕が密着した。

プールの中で他人の皮膚と完全に密着することなどあまり多くはなくて、あつたとしてもかなり気持ちの悪い出来事だろう。

だがこの時の美咲との皮膚の密着は、達也にとってスイッチが入ったというか、痴態をブーストさせるきっかけとなった。

「お名前は？」

「えっ？」

一瞬、何を聞かれてるのか判らないといった顔をしている美咲だったが、

「下の名前だけでもいいんだけど」

にこやかな表情でそんなことを聞いてくる達也に、ほんの数秒の間を置いてから、

「み……美咲……」

美咲はかなり躊躇しながら答えた。それは達也の思惑にこのまま従って答えるべきなのかそうすべきでないのか、瞬時に判断することを躊躇しているようだった。

「そう……美咲ちゃんていうんだ」

かなり満足した様子の達也。とりあえずの最初の壁は突破したような、そんな顔をしている。

「毎週来てるのかな、ここ？」

「……は……はい」

まるで不審な男を見るような目つきで達也の質問に答えている美咲。

「ふうくん」

そう言いながら美咲のうしろの首筋あたりに目をやる達也。

高校生にしては色っぽいなじをしているなと思った。水泳キャップをかぶっていて、おそらく長いと思われる髪の毛はまとめてキャップの中で盛っていきそうな感じ。それくらい後頭部あたりの出っ張りが大きい。

「ねえさっきのバタ足なんだけど……もう一度だけやって見せて欲しいなあ」

今度は高校生に言うには少し強めに言った。

「はっ？」

戸惑う美咲だったが、自分より体も大きくて年もかなり上の達也に対して、何も言い返

せない様子。

さらに間髪いれずに、

「ちよつと近くで見てみたいから——そうだ、『はいっ』で言ったらやってみてよ、ねっ」
ほとんど命令口調でそんなことを言った。

「えっ……」

信じられないという表情をしている美咲。まさか水中に潜って自分の脚を見る気なのか？ という顔だ。

「ちよつと見せてもらうけど、いいよね」

そんなことを平然と提案する達也だったが、それはまさに確信的な言い方だった。

「えっ……ちよっ……」

そんなこと出来ない、と言おうとした美咲だったが、

「じゃ、はいっ」

すぐにその場で水中に潜る達也。美咲は、突然の達也の提案に戸惑ったまま、その場で足をもじもじとさせている。

達也の目の前には美咲のお尻の横の部分がある。競泳水着特有のかなり高い位置まで肌が露出しているデザインなので、美咲の中殿筋から大殿筋にかけての筋肉を覆った肌白色が露わになっている。

そして白い曲線美の向こう側に、真横から見るとちやうどその盛り具合が露骨に見えてしまう恥丘があつた。へその部分から少しずつ角度を変えていき、なだらかだつた線が秘部めがけてこんもりとした形のいい丘陵を形作っている。

水着で覆われていない股間の横のはみ出した部分、つまりハイレグのせいではみ出したモリマン部分を注目した。そこには年配女性のような恥毛を剃つた後のような箇所はない。恥ずかしそうに水着のゴムで押し出された肌白い肉があるだけだ。

思わず丘陵の下の方から指先でツンツンと押し上げたくなつた達也だったが、それはさすがに我慢した。

しばらくもじもじと恥ずかしそうに交差させている美咲の脚と、それに伴つて盛り具合が変化している盛りマンの様子を堪能していた。

そろそろ息が続かなくなつてきたので、

「ふはあーっ」

水中から出ると達也は、

「やっつて、お願いっ」

達也は両手を合わせて美咲にお願いした。苦笑いした美咲は、

「はあ……」

嫌々それに応じることにした。

美咲は決して、自分の脚を中年オヤジに近くでじっくりと見られることが嫌という訳ではなかった。自分の身体の形には自信を持っていたし、でなければこんなハイレグ水着なんか着れるはずはない。

ただ、こんな場所で自分のクロールのバタ足を、こんなに真剣に見たいと言い出す男に少し呆れていたのだ。

「じゃはいっ」

再度、その場で水中に潜る達也。

達也はさつきと同じように、美咲の股間のすぐ横に中腰になった。ちょうど美咲の盛りマンが、達也の目の前にくるような高さだ。

「はあく」

なんかバカバカしいと思った美咲だったが、しょうがないとつととやって終わらそうと思った。嫌々ながらも片足を挙げてクロールのバタ足の真似をする美咲。どう考えてもお遊びに似たようなバタ足のやり方だった。

しかしそんな馬鹿みたいなバタ足だとしても、達也にとって目の前でしかも自分のためにやってくれているこの美処女の脚ならば話は別だ。

(ほほほう……)

間近で眺める高校生の生足。しかも水泳をしている女の子特有のある程度肉付きのいい

太ももと、さらにびったりと肌に張り付いた薄手の水着に覆われて、足を揺らす度にその形が姿を変化させる盛りマン。

数秒間くらいは、目の前の美咲の無気力なバタ足をただ見ているだけだった。

しかしそのうち、達也の指先が美咲のつま先を触り始めた。

「えっ、ちよ……なにつ……」

美咲は思わずつま先で、達也の指先を軽く蹴とばした。

(おっ)

たいして痛くはなかったが、手を蹴られたことにちよつと不意をつかれた気がした達也は、

(ならこうだな……)

彼女のその軽い「蹴り」を自分に対する「遊び」だと受け取り、今度は指先で彼女の足の裏をくすぐった。

「ひっ」

まさかそんなことをされるとは思ってもみなかった美咲は、足挙げ走りのような恰好つまり太ももを急に上げ、足全体を水中から引っこ抜いた。

「ちよつと、止めてくださいっ」

水面に顔を出した達也の目の前で、顔を真っ赤にしている美咲がいた。口調は怒ってい

るようだったが、その表情はそういうことをされるのも悪くないと言っているように見え
た。

「ごつごめん。つま先の動かし方を確認しようとしたらつい——」

必死で弁明をする達也。決してスケベ心ではなくて、バタ足の技術を知りたかったのだ
とアピールした。

「もう〜」

ちよつとだけ口を尖らせていたが目は笑っている気がした。

「ごめんね」

達也は美咲の耳元でワザと息がかかるように囁いた。

かなり近い距離でしかも今までの声のトーンよりもかなり低い声をだしたせいか、

「う……うん」

美咲もつられて何かちよつと大人っぽい声で返した。

「美咲ちゃんみたいな女の子に教えてもらえておじさんもうれしいよ。ありがとう」

それは本当の気持ちだった。そしてそれを躊躇することなく彼女の耳元で囁いた。

「……」

美咲は黙ったまま水面をぼんやりと見たままだった。焦点はちゃんと合っていない。

達也はすぐに右手の指先を、彼女の恥丘の真ん中付近に滑り込ませた。

「美咲……ちゃん……」

間髪入れずにそう耳元で囁いた。

囁きながら右手の指先は彼女の一番敏感な箇所をまさぐり当てている。

しばらくは何が起きているのか、ちゃんと理解できない様子の美咲。何か夢でも見ているかのような感じで身体が硬直していた。

「すごく素敵だよ」

さらに指先を、縦に擦り付けるように割れ目に食い込ませる達也。

「えっ」

おそらく男に恥丘さらにはクリトリスを触られたのは初めてだと思う。

「……いつ、いやっ」

ようやく自分が何をされているのか判ったのか、美咲は太ももを内側に擦りつけ、達也の指先が自分の股の間に入ってこないよう阻止しようとした。

達也は股間に滑り込ませている指先に力を入れた——達也は男でいくら美咲が抵抗しようとも逃れられないゾということを力で誇示してみせた。

さらに、

「ねっ……気持ちいいことしょっ？」

言葉ではやさしく言いながら、声色は低くそしてドスの効いた声だった。

「……」
いう事を聞かないと何をするか判らないゾ、という意味を含んだような感じで言った。

「……」
達也の指先からの刺激で下半身をビクビクと震わせている美咲。

達也はさらに中指をグリグリと肉ビラをえぐるように掻き回す。

「いやっ」

小さく悲鳴を上げる美咲。

「静かにしろ」

耳元で囁く達也。

「……」

大きな声で助けを求めればどうにかなる状況だったが、まさか自分がこんな状況に出会うとは思ってなかった美咲は、達也の言われるがままの状態だった。

そして知らない中年男から、自分が性的イタズラをされているという自覚もあまり感じていなかった。それくらい突然のことですらにパニック状態に陥っていた。

「よし……いい子だ」

今度は2本の指先を、美咲の徐々に割れ始めた股間の割れ目の中で前後させた。

プールの中なので、どれくらいか愛液が膣から漏れ出しているのか判りにくかったが、水着の薄い生地の上から膣口と思われる場所に指先を押しつけると、周りのプールの水と

は異なる感触の液体というか触り心地があった。

アンダーショーツの内側には、べとべととした液体がすでに漏れ出しているかもしれない。

水中では2本の指先で美咲のクリトリスさらには膣口を刺激していたが、水面上では達也は何くわぬ顔をしていた。はたから見たら、達也がまるで美咲にバタ足の仕方のレクチャーを受けているような感じだった。

しばらくするとコースの反対側から香が泳いで帰ってきた。そして泳ぐのを止め、その場につつ立ったままになった。

彼女らの泳ぎの予定とは明らかに違うし、どこかの知らない中年男がコース内のおまけに美咲のすぐ隣にいるのだ。

案の定、すぐに香は美咲に何かマズイことでもあったのだろうかと思ったようで、

「み……美咲？」

顔を真っ赤にしている美咲に向かって聞いた。

香がなるべく隣の変な男とは目を合わさないようにしているのが判った。

「か……香」

苦笑いをする美咲。

その直後に、達也の2本の指先が彼女のクリトリスを水着越しに強く摘まみ込んだ。

「ひっ」

あまりに痛かったのか、美咲は小さく悲鳴をあげた。だがソレが達也からの警告だとすぐに理解した美咲は、

「ちよつと知り合いのおじさんにバタ足を教えてるところなの——先にあがつといて、ごめん」

美咲は作り笑いをした。

それでも不審そうに達也の顔をじろじろと見ている香。

しようがないと思つた達也は、

「ああ……はじめまして、君が香ちゃん？　美咲ちゃんからよく聞いてるよ、バタフライが得意なんだってね」

香という名前はさつき美咲がそう言ったのを聞いていただけで、バタフライが得意だということとは彼女の肩周りを見ればだいたいの予想はついたし、前回来た時にバタフライばかり泳いでいたのを覚えていた。

知らない筈の香という名前と、彼女がバタフライが得意だということを達也が知っていたせいか、

「はあ……それはどうも」

本当におじさんなのかもしれない、香はそんな表情をしていた。

「ごめんね、ちよつと美咲ちゃんを借りるよ」

ひょうひょうと続けて美咲にバタ足を教えてもらおうフリをする達也。一方で、ひきつった笑顔で香にバイバイをする美咲。